

理解促進 弾み期待



東京大の梶田隆章宇宙線研究所長は、地下千分の観測装置スーパーカミオカンデ（岐阜県飛騨市）で、重さがないと考えられていたニュートリノに質量があることを発見。宇宙や私たちの身の回りは何でできているかを説明する基本的な理論である「標準理論」を覆

日本人にノーベル物理学賞

素粒子「ニュートリノ」の研究で日本人がノーベル物理学賞を受賞したことで、素粒子から宇宙の成り立ちを探る基礎研究が注目を集めている。本県の北上山地（北上高地）が候補地になっている国際リニアコライダー（ILC）も実験手法は違おうが、同じように素粒子から宇宙の成り立ちを探る研究。誘致関係者は、今回を機にILCへの理解も広まることを期待している。

素粒子研究が脚光 県民にも身近な好機

す偉業が評価された。今後の素粒子物理学界は、見つかっていない超対称性粒子の発見などで標準理論をどう拡張するかが大きなテーマとなる。その一つの手法が、地下約1000分のトンネルに設置した超大型加速器で宇宙の成り立ちを探るILC。ヒッグス粒子を

子核物理作業部会の座長を務めている。素粒子物理が脚光を浴びる中で、同会議がILCについてどのような判断を示すかも注視される。

今回の受賞で素粒子に光が当たっていることについて、ILC戦略会議議長で東京大素粒子物理国際研究センターの山下了准教授は「素粒子が話題になり、真の基礎理論は何かに目が向くのは素晴らしい。素粒子の世界ではニュートリノもヒッグスも一体。ILCの理解を進める上でもプラズマになる」と受け止める。 県科学ILC推進室の佐々木淳室長は「素粒子物理に対して県民の関心も高まっている。ILCを少しでも身近に感じてもらえれば」と期待する。

詳細に研究し、さらに未知の超対称性粒子なども発見できればノーベル賞級の成果だ。 また、梶田氏は現在、文部科学省のILCに関する有識者会議の委員、同会議の素粒子原